

2021. 6. 30 (水)

## 「やましき沈黙」と「パレーシア」

奥村 隆

はじめに

本日は、お話する機会をいただき、どうもありがとうございます。前回チャペルでお話したのは2017年で、そのときは「幸せって何だろう?」という共通テーマでした。でも私は「三つの時間」というだいぶ違った話をしてしまいまして、私はどうも天邪鬼で、いただいたテーマと別の話をする悪い癖があるようです。きょうの「日常と非日常」というテーマについてもちょっと別の話をしたくなってしまう、「やましき沈黙」と「パレーシア」というふたつの言葉についてお話ししてみようと思います。

「特攻」と「無責任の体系」

——やましき沈黙について

「やましき沈黙」という言葉は、10年以上前、2009年に放映されたNHKスペシャル『日本海軍 400 時間の証言』で出会ったもので、ずっと心にひっかかっている表現です。この3回シリーズのドキュメンタリーは日本海軍元メンバー、とくに作戦を立案する立場にあった海軍軍令部の元将校たちが1980年から1991年まで131回にわたって行った「海軍反省会」の録音記録に基

づくものですが、第2回は「特攻 “やましき沈黙”」と題され、「特攻」がどう計画・実行されたかを追っています。

みなさんご存知のように、「特攻」は人間の肉体を爆弾代わりにして敵艦に衝突する作戦で、戦闘機による「神風特攻隊」や、人間魚雷である「回天」など、1944年10月に開始され、5000人以上の兵士が犠牲になったといわれます。若い兵士たちの志願で始まったといわれることがありますが、海軍軍令部はもっと早くにこの作戦を立案し、兵器の開発などを進めていたことが、このドキュメンタリーで明らかにされています。

そして、その意思決定プロセスを支配したのが「やましき沈黙」でした。この作戦は兵士の死を100%前提にした作戦で、決して命じてはいけない作戦とみながわかっていました。しかし、間違っていると一人一人は心の中で思っている、組織がその方向に進むと口に出すことはできず、組織の空気に飲み込まれて、自分の意志ではない方向に流されていく。これが「やましき沈黙」です。こうして「絶対に越えてはならない一線」を超え、「とりかえしのつかないこと」が起きてしまう。ナレーションは、「一度始まると、誰も止められず、敗戦まで特攻は続けられました」と語っています。

このような沈黙を生む組織を「無責任の体系」と呼ぶこともできるでしょう。丸山眞男は1949年の「軍国支配者の精神形態」で、日本ファシズムが「神輿」（権威）、「役人」（権力）、「無法者」（暴力）からなる「龐大なる「無責任の体系」」であって、誰も責任を負わないまま戦争になだれ込んだ、と指摘しています。東京裁判でのA級戦犯の証言は、25名のうち「誰一人としてこの戦争を惹起することを欲しなかった」というものでした。

丸山はそこにはふたつの態度があったと論じます。ひとつは「既成事実への屈服」、既に決まった政策には従わざるをえなかった、既に開始された戦争は支持せざるを得なかった、たとえば「個人的には反対でありましたが、すべて物事にはなり行きがあります」とする態度です。もうひとつは「権限への逃避」、「私の職務は〇〇でしたから、その事柄には権限がなく、なにでもできませんでした」と述べるように、自分の形式的権限を絶対化してそれに閉じこもり、私には責任がない、と主張する態度でした。

ここまでの話を聴いて、みなさんのなかには、70年以上前のこの話が、いま目の前で繰り返されていると感じる人がいるかもしれません。「特攻」の回の終わりで、キャスターの小貫武は「やましき沈黙を他人のこととしてすますわけにはいかない。私自身やましき沈黙に陥らないとは断定できません」と、絞り出すように述べています。

## 「率直に語ること」と「民主主義」

### ——パレーシアについて

さて、もうひとつの言葉、「パレーシア」

について急いでお話ししましょう。この言葉は、みなさんもよく知っているフランスの哲学者ミシェル・フーコーが、晩年に注目した概念です。フーコーは1984年、57歳でエイズによって亡くなりましたが、1982年からの最後の3年間、コレージュ・ド・フランスでの講義で繰り返しこの言葉を取り上げています。

その入り口は「自己への配慮」というテーマでした。自分の財産とか地位とかではなく、「自分自身」を配慮する、「自分自身」を大切にするにはどうすればよいか、これをフーコーは古代ギリシア・ローマの文献のなかに探っていきます。そのために重要なもののひとつは「師」、私の「自分自身」を配慮してくれる先生であり、その「師」がパレーシアをもって語ってくれるということだ。「パレーシア」とは「すべてを語ること」「率直に語ること」であり、「言うべきことを言いたいときに言いたいように語ること」「真実を語ること」です。そうしてくれる先生をもつことが、自分自身を大切にするのに決定的だということです。

フーコーはパレーシアにはふたつの敵がある、といいます。ひとつは「追従」です。他の人、とくに地位が上の人に対して下の人が気に入るようなことを言って、恩恵や好意を勝ち取ろうとすることです。パレーシアは「反（アンチ）追従」であり、相手が気に入ることではなく、自分が思っていることを語ります。もうひとつの敵は「弁論術（レトリック）」、つまり話す技術です。これは相手を説得して、自分が利益をあげるためのものです。これに対してパレーシアには「真理」そのものの伝達しかなく、話しかける相手が自分自身との関係をつくり直し、ほんとうの意

味で自分自身を配慮できるようになることを目的とします。そのように語ってくれる「師」がいることがほんとうに大切だ、というわけです。

そして、このことは「君主に対する率直さの問題」にもかかわってきます。誰が君主に率直に忠告をするか、誰が君主に真を語ることができるのか、という問題です。みなが君主に気に入られようとして率直にものが言えないとき、つまり「追従」し、「パレーシアがない」状態において、「人はあたかも奴隷のようになる」とフーコーはいます。「パレーシアを持たなくなった時から、主人の愚行に耐えなければならなくなる」、そして「狂人に合わせて狂い、愚かな人たちに合わせて愚かであること以上に辛いことはない」。これに対してパレーシアをもって語る「パレーシアスト」は「立ち上がり、立ち向かい」、「主人の愚行に対して真実を語り」、「主人の愚行を制限する」。フーコーは、「民主制が存在するためには、パレーシアが存在しなくてはならない」、逆に「パレーシアが存在するためには、民主制が存在しなくてはならない」と、「パレーシア」と「民主主義」の関係について述べています。

ただ、これがとても危険な行為であることはすぐにわかりますよね。フーコーは、パレーシアがあるのは「真実を言うこと・言ったことが、真実を言った人の身に大きな犠牲を引き起こすような条件において真実の語り」がなされる場面、「ほんとうのことを語ることが話し手に危険をもたらす場面」である、と指摘します。だから、パレーシアストは「真実の語りが自分の存在を犠牲にすることになることを受け入れたうえで、ほんとうのことを語ろうとする者」であり、「ほんとう

のことを語ることによって死ぬことを受け入れる者」である。私たちは、そうしたパレーシアストとして、真実を語り続けて殺されることになった、ソクラテスやイエスのことを思い出すことができるのではないかと思います。

### 「非日常」において問われる「日常」

やはり「日常と非日常」というテーマとはずいぶん違う話になってしまいました。ただ、無理やりこじつけてみると、「日常」において「パレーシア」が必要になったり、求められたりすることはあまりないかもしれませんが、おそらく「非日常」の、クリティカルな局面で「パレーシア」を実践できるかどうか重要なことになる。でも、そうした局面で率直に真実を語ることはじつに難しいことです。「やましき沈黙」や「追従」への力が私たちに押し寄せてくる。「日常」の生活においてパレーシアを実践していないで、「非日常」になったときにそうすることはほぼ不可能かもしれません。

「日常」では率直に語りうるが、そうする必要はなく、それが求められる「非日常」において真実を語ることはほんとうに難しい。そのとき、私たちの前に「やましき沈黙」が口を開けて待っている。でもそれを選んでよいのか。新型コロナウイルスがもたらした「非日常」のなかで、私たちはこうしたことを問われているのかもしれませんが、まとまりのない話になってしまいましたが、これで私のお話を終わりにします。どうもありがとうございました。

(社会学部教授)